

一九二〇年代中国における「同性愛」
—日本を経由する知の受容—
“Same-sex Love” in the 1920s of China:
The Reception of the Knowledge via Japan

鄒 韻
ZOU, Yun

摘要

This paper discusses the reception of knowledge about “same-sex love” in the 1920s of China. Since the start of the 20th century onwards, Western knowledge and concepts about sexuality were introduced and translated to China via Japan, among which the concept of homosexuality raised by Krafft-Ebing and Edward Carpenter played an important role in shaping the perceptions of Chinese intellectuals. Quite in contrast to its popular reception in Japan, the Chinese translation of Krafft-Ebing’s *Psychopathia Sexualis* in 1906 did not resonate much among local intellectuals. Carpenter’s theory of “Intermediate Sex” was a totally difference case: after having been repeatedly translated from its Japanese version in the 1920s, it generated much wider public attention. By examining *The Debate on tongxing’ ai* (published in 1930), this paper argues that Chinese intellectuals viewed homosexuality as a social issue rather than a medical problem of sexual identity. The introduction of Carpenter’s theory turned the concept of “Intermediate Sex” into a weapon to fight against existing abstinent rituals in modern China, as well as an expression of comradeship and solidarity.

キーワード：同性愛 近代日本 近代中国 クラフト＝エビング エドワード・カーペンター

Keywords: Same-sex Love Modern Japan Modern China Krafft-Ebing Edward Carpenter

1. はじめに

明治末期から大正期にかけての近代日本では、西洋の性科学の受容より、同じジェンダーに対して性的欲望を持つことが「同性愛」とされ、病理的・変態的な行為と見做されてきた。中でも大きな影響を及ぼした性科学は、リヒャルト・フォン・クラフト＝エビング(Richard Freiherr von Krafft-Ebing)の『性的精神病質』(*Psychopathia Sexualis*)であった。本書の位置づけは、新井正人⁽¹⁾の言葉を借りれば、『性的精神病質』の邦訳、すなわち 1891 年に始まる『色情狂編』の雑誌連載と 1913 年刊行の『変態性欲心理』が画期をなしており、特に後者は大正期の通俗性欲学の隆盛を準備した著作であるという。また、通俗性欲学が流通していた大正時代に入ると、クラフト＝エビング論の他にも例えば、イギリスのハヴロック・エリスやエドワード・カーペンターの同性愛研究も多く知識人によって注目され読まれていた⁽²⁾。これらの知によって、近代日本では同性間の性行為が変態性欲と見做され、その後当事者たちが自ら同性愛と名

乗り、投稿欄を通して自己表現しはじめた⁽³⁾。まさにミシェル・フーコー (Michel Foucault) の言う通り、「同性愛者は、一個の登場人物となった」⁽⁴⁾のである。換言すれば、性科学によって語られる同性愛が主体化され、人のアイデンティティとして見做されるようになったということだ。

一方、近代以前の中国では、同性間の性行為は文化的にタブー視されていなかった⁽⁵⁾。中国でも 19 世紀末に入ると、数多くのヨーロッパの性科学、とりわけ「同性愛」に関する知を、日本を経由して受容してきた。清地ゆき子の研究⁽⁶⁾によれば、1920 年以降の中国では日本の文献の翻訳により、中国語の中にも「同性愛」、「同性恋愛」等の言葉が流通していた。白水紀子⁽⁷⁾も、1920 年代に中国語で「同性愛」という言葉が誕生し「これも当時の日本の刊行物で使われていた訳語がそのまま使われ」ていたことを指摘した (215 頁)。そして、桑梓蘭 (Tze-Lan Sang)⁽⁸⁾、Wenqing Kang⁽⁹⁾、陳静梅⁽¹⁰⁾等近代中国の同性愛に関する先行研究の中では、いずれも近代中国における性科学及び用語の流通が同時代の日本からの影響を無視できないと述べられている。本稿は、1920 年代中国における同性愛をめぐる知はどのように日本から受容されたのかを明らかにし、このような知を中国の知識人たちはどのように受け止めていたのかを考察する。

2. 先行研究

まず、これまでの先行論を以下の二つの方面から整理する。第一に、前述の通り、日本という媒介は極めて重要であると考えられる。日本との比較の視点としては、例えば上述した清地の研究が挙げられる。だが、清地の研究は近代の日中語彙交流を視点から日本語の「同性愛」と中国語の「同性愛」という言葉の浮上の歴史を考察したもので、語彙レベルの変容を考察しただけで、語彙の背後に隠された民国期における同性愛問題への認識の問題を見落としていると思われる。また、白水は民国期におけるセクシュアリティの変容を「正常」と「変態」の二つの状態に分けられ、結婚に結びつかない恋愛と生殖目的から外れるものは「変態性欲」として差別され、一種の「精神病」、「心」の病気として扱われて、治療や教育の対象とされるようになっていった」(前掲、216 頁) ことを指摘した。だが、「変態」、「倒錯」等大正時代の日本で流通していた言葉がそのまま中国語に持ち込まれた際に問題になるのは、同じ漢字を使用しているものの果たして両者は同じ意味なのかということである。そこで、言葉の背後にある性科学の受容への考察が不可欠であろう。

第二に、1920 年代の中国では、知識人たちはどのように同性愛を認識していたのかという観点だ。先行論では、知識人たちの同性愛への態度は「寛容」⁽¹¹⁾であることや、多様な意見が存在していたことを論じている。桑梓蘭は知識人たちの「意見が一致していない」と指摘し⁽¹²⁾、陳の研究では「多音併存」(数多くの意見が同時に存在していた)と述べられている。スーザン・マンも「同性関係についての考えは二〇世紀を通じてずっと、幅広く折衷的なものであった」と指摘している⁽¹³⁾。また、白水は 1920 年代の中国においては同性愛が「教育によって治る、あるいは未然に防ぐことができると見なされていた」と具体的な問題点を指摘した(白水 2015

年、215 頁)。つまり、「同性愛」をめぐる知識人の議論には、数多くの意見が存在していたことが先行研究から窺えるのである。また、Wenqing Kang は後述する 1930 年に出版された『同性愛問題討論集』という史料を発掘した上で、当時の知識人たちは「社会改革や国家振興のために」同性愛の理論を中国に紹介し、同性愛は「個人的な医学の問題というより、社会的な異常・逸脱とみなされていた」と指摘した (Kang 2009 年、42—43 頁)。

本稿は 1920 年代の中国における「同性愛」が個人の性の問題ではなく、社会的な問題とされていたという Kang 論に同意する。だが、このような知識人の寛容で多様な認識は、どのように形成されてきたのか、また具体的にどのような知的枠組みに基づいてたどり着いたのかを明らかにする必要があると考えられる。

したがって、本稿は日本語の「同性愛」とその言葉の背後にある性に関する知が、どのように民国期の知識人たちによって翻訳され、語られていたのかを考察する。時系列に沿って、これまでの研究において掘り出されなかったクラフト＝エビングの翻訳、及びエドワード・カーペンターの翻訳と出版の経緯を明らかにすることで、1920 年代の中国における同性愛をめぐる知的空間及び知識人たちの認識の変容を考察する。なぜこの両者を中心に考察するかというと、両者の同性愛研究はそれぞれ近代日本、近代中国における同性愛への認識に大きな影響を与えたからである。まず、清末期におけるクラフト＝エビングの翻訳に焦点を当て、同性愛への医学的なまなざしがどのように中国に受容されたのかを考え直す。次に、1920 年代の中国に大きな影響を与えたエドワード・カーペンターの「同性愛」の理論の翻訳と出版経緯を明らかにする。最後に、1930 年に刊行された『同性愛問題討論集』に注目し、近代中国におけるクラフト＝エビング派とエドワード・カーペンター派の論争を通して、同性愛に対する知識人たちの認識を検討する。

3. 清末期におけるクラフト＝エビングの翻訳

3. 1. クラフト＝エビングの同性愛研究と近代日本におけるクラフト＝エビングの受容

クラフト＝エビング(1840-1902)は 19 世紀にドイツ語圏で活躍していた精神科医である。著名な『性的精神病質』は、ドイツで 1886 年に公刊されて以来、さらに多くの事例を取り入れ、改訂、刊行され続けてきた性科学書である⁽¹⁴⁾。

新井の考証によれば、クラフト＝エビングの理論が日本に最初の紹介されたのは、1886 年帝国大学医科大学の精神病学教授である榊俣の講義であった。19 世紀の終わりに、ドイツ語圏へ留学していた呉秀三、青山胤通や森鷗外⁽¹⁵⁾などを通じて、クラフト＝エビングの理論が徐々に日本へ導入されていったことがわかる。また斎藤光によれば、現時点では『性的精神病質』の日本における早期の紹介は、1889 年の森鷗外による「ルソウオが少時の病を診す」である可能性が高い⁽¹⁶⁾。氏の考証によると、1891 年から 1894 年にかけて『性的精神病質』は「色情狂編」の題名で『裁判医学会雑誌』に、後に『法医学会雑誌』と改名された雑誌に連載されていた。1894 年に、雑誌に連載された翻訳がまとめられ春陽堂より『色情狂編』という題で出版された。

さらに、1913年、『性的精神病質』は『変態性欲心理』（黒沢良臣訳）という題名で大日本文明協会によって再出版された。また、1922年に『変態性欲の研究』（高橋毅一郎訳）の題名で白水社によって刊行されたことが確認できる⁽¹⁷⁾。

次に、1913年に再版された『変態性欲心理』を参考にし、クラフト＝エビング論における「同性愛」がいかに論じられるのかを見てみよう。本書における同性愛は「性欲感覚の倒錯症（性欲倒錯）」に所属させられる。繁殖を目的とした異性愛の性欲が正当なものであり、それを満たさない場合、異性愛の代償となる性的欲望・行為は倒錯だと見做される⁽¹⁸⁾。このような認識枠組みの中では、人が精神的な病気を患うことによって同性に対し性的欲望を喚起させ性的行為を招くこととなるのであり、さらには身体による変質的な変化（男性化・女性化）をさせることとなる。では、このような認識はどのように中国に紹介され、翻訳されたのだろうか。

3. 2. 清末期におけるクラフト＝エビングの翻訳

受容と翻訳を明らかにする前に、まず、清末期の中国での性科学の導入と流通を論じる⁽¹⁹⁾。ヴィクトリア朝期の性科学は日本を経由して、中国に翻訳されることが多かったとみられる。1901年に『男女交合新論』、『生殖器新書』、『伝種改良問答』、『吾妻鏡』等の性科学書が上海で出版されたことがわかる⁽²⁰⁾。楊力は「19世紀英米の性＝愛＝結婚という三位一体の性規範は清末中国に伝わり、中国伝統社会に存在した子孫の繁栄と、清末に出てきた「強国保種」という二つの要請が、性の正当性を生殖の手段として保証した」⁽²¹⁾と「強国保種」に合致する清末の性科学の役割を論じている。唐権は、「清末の知識人たちが学習したセクソロジーの中身がけっして純粋な科学的知識に根ざしていなかった」ことを指摘し、彼らが「強国保種」などのスローガンの下、日本の『造化機論』⁽²²⁾等様々な知識を紹介したと述べる⁽²³⁾。このように、先行研究では、清末期の性科学書が「強国保種」などのスローガンの下で紹介され、また男女の生殖に関するものが多く、同性間の性行為にはあまり言及されなかったとみられてきた。

だが、筆者の調査によれば、清末期にはすでにクラフト＝エビングの『性的精神病質』の抜粋が中国に翻訳されていた。1906年に『雁来紅叢報』⁽²⁴⁾という雑誌において「色情狂病理」を題名とする文章が掲載されていた。掲載誌である『雁来紅叢報』は、文学に限らず医学や心理学、哲学など各分野の文章を扱う総合誌であった。「色情狂病理」という題目と目次からは、1894年に刊行された日本語版の『色情狂編』から重訳されていたことが推測できる。だが、掲載の部分は『色情狂編』の総論と目次⁽²⁵⁾しかなく、中国版の全訳はいまだに不明である。さらに、総論では訳者による訳補や注釈が多いとみられる。以下では、原典の日本語版と照らし合わせて、訳者の翻訳の意図とクラフト＝エビング論の位置づけを検証してみよう。

まず、生殖を論じる性科学の重要性について訳者は次のように翻訳している。日本語版は「財産を子孫に遺す強き衝動となり、家族団欒の基礎、懐古感情の惹起となり、次きて男子は女子、女子は男子に対し、次は小児に対する愛情となり人間相愛万国交通の基を成すにあり」と生殖の重要性が記されている。一方、中国語版の中では、訳者はあえて生殖のことを「社会の愛や

種族の愛、国家の愛など広義の愛」として位置付けている。このような訳補は単なる誤訳ではなく、性に関する医学書である『性的精神病質』の位置づけと関連しているものである。

日本では、『性的精神病質』は専門家むけの医学書であったと見られる。同書を紹介、翻訳した知識人は医学者であった。そして、当時の新刊紹介から分かるように、「是れ独り医学者及び裁判官に限りて読ましむべきものならん」⁽²⁶⁾とごく限られた専門の医学界と司法界の領域で広げることが望まれていたのであり、正統な医学書として位置付けられていたと思われる。一方、中国では「強国保種」に合致する性科学、また国家や民族の性の文明論として読まれていたのだろうと以下の訳者の注釈から窺える。

例えば、原文では「昔の人類の生殖は動物と変わらず、男女たちが集まって裸になる習慣がある。オーストラリアなどの国では、まだ婦人を道具扱いするような不良な風俗がある」というようなことが記されている箇所の続きに、訳者は次のような注釈を付け加えている。

昔の人や外国の風俗を特に怪しむことはないだろう。四千年の文明の国の中には、男女を裸にして人と獣を雑交させるのを、衆人には楽しみとしてみる人もいる。売買交易について言うならば、豪家は愛する妾を馬に交換する場合もあり、そのことをよい話として詠んだ詩歌も広まっている。妓女を殺し下女を蒸してつまみとして酒を飲むなど、人間を食べる野蛮の民族でもこのような無慈悲ことはしないだろう。⁽²⁷⁾

ここの「四千年の文明」の国とは中国のことを指すと思われる。つまり、性を売買することや女性を動物扱いするなど野蛮であった昔の中国を皮肉に述べているのである。一方、訳者は続いてヨーロッパの風俗に言及し、女性が上着を脱ぎ、肌をだすことが礼儀正しいこととされ（貴女則袒裼⁽²⁸⁾為儀）、医者前で裸の女性が恥じない（全裸婦女就醫者露穢于男子前絶無所惡）ということに対し、さすがに理解不能であると述べている。文明国は性道徳や貞操を尊ぶべきだという。訳者はこのような文明と野蛮との意味をさらに東洋・西洋という二つの枠組みの中で理解しようとする。

近来、東洋の婦人はその才では西洋人に敵わないが、青い瞳で金髪の美女はその私徳においては東洋の婦人に匹敵できないと、ドイツの哲学者のショーペンハウアーは婦人論においてかつて論じた。⁽²⁹⁾

この注釈から考えると、訳者は身体露出を批判し、伝統的な貞操観を提唱しているだろう。文明世界における婚姻制度は性の倫理に基づき生殖を目的とするものとするこのような受容は、本節の冒頭の部分で述べた「強国保種」といった清末期の性科学の主張と合致しており、性をめぐる倫理・規範を提唱することを前提として語られている。

また、雑誌に掲載された部分では「同性愛」に関する理論は紹介されず、目次だけが残されている。日本語版の「他性に対する情慾非常に減退したるか或は全く廃絶し之に代ふるに同性に対する情慾大に亢進せるもの」を、日本語の漢字をそのまま残し、「對於他性情慾減退或費絶對同性則情慾亢進者」と訳している。

日本の明治期から大正期にかけて、クラフト＝エビングの『性的精神病質』は同性愛の医学的な基礎的な知として位置付けられ、戦前に三度も訳されて、多くの知識人によって読まれていた。だが、中国では『性的精神病質』の全訳は現れなかったのであり、日本での受容とはまったく違うと言えよう。専門的な医学知識として翻訳された明治期の『色情狂編』に対して、中国語版の「色情狂病理」は、その核心となる医学の問題が抹消され、かわりに性をめぐる文明論の問題として読まれた。『性的精神病質』に基づく「変態」、「顛倒」、「倒錯」等の概念に対して知識人はどのようにしていたのか。この点については、5 節にて『同性愛問題討論』の分析を通して後述する。

4. 1920 年代におけるエドワード・カーペンターの受容

民国期初期には、同性愛に関する医学への関心が欠如していた一方でエドワード・カーペンターの著作が知識人の間で一世を風靡した。当時語られた「同性愛」という概念は、医学の知識に基づいた概念というより、むしろカーペンターのいう「Intermediate Sex」や「Homogenic Attachment」に近いとみられる。この期の中国は「同性愛」に対して「寛容」であったとされるが、それはカーペンター論の受容と関連しているだろう。

4. 1. エドワード・カーペンターの思想及び日本における受容

エドワード・カーペンター（1844—1929）は、性の禁忌に抑圧されたヴィクトリア朝に生きるイギリスの社会主義思想家であり、詩人でもあった。19 世紀末のイギリスでは、同性愛を脱犯罪化しようとする様々な性科学が現れた。そうした同性愛が医学的な問題へ転化していく歴史背景のなか、カーペンターは病理化された同性愛の問題に対してその性的な要素を後景化して、同性愛者のアイデンティティの尊重を呼び掛けた。Jeffrey Weeks も指摘したとおり、性を生殖（procreation）から解放しようとしたのであり、エリスを代表とする実証主義や生物学研究から逸脱するという点がカーペンター論の貴重なところである⁽³⁰⁾。カーペンターが直面するのは、法律との戦い及び同性愛を先天的な性倒錯と扱う医学を如何に取り上げるのかという複雑な問題であった。そこでカーペンターは、こうした性の倒錯とされる同性愛を、「the Intermediate Sex」と名付け、中間的な性に見做すことによって同性愛者の解放を呼び掛けていた。

さて、カーペンターの著作の出版に関しては、都築忠七⁽³¹⁾の考証によれば、次のような経緯が窺える。まず 1894 年に、社会主義文献を扱う出版社によって四つのパンフレットが出版された。その中では同性愛に関するものは「Homogenic Love, and its Place in a Free Society」（自由社

会における同性の愛とその位置)が挙げられるが、検閲のため私的な配布に限定され公開できなかった。そして 1896 年に、「同性の愛」のパンフレットを除いて残りの三つのパンフレットをまとめたものが「Love's coming-of age: A Series of Papers on the Relations of the Sexes」と題して刊行された。1906 年には「同性の愛」の部分（「The Intermediate Sex」という章）が補足され再出版された。さらに、1908 年には同性愛を論じる単行本『The Intermediate Sex』（中性論）が出版された。

次の表 1 のように、近代日本におけるカーペンターの翻訳では社会主義運動家として活躍していた堺利彦（1871－1933）と山川菊栄（1890－1980）によるものがもっとも注目に値するだろう。しかし二人が訳したバージョンはすべて「同性愛」の部分を省いていた。堺利彦自身の発言によると、同性愛の問題は「僕としては、余り現在の社会問題と縁が遠すぎるので、特に研究する程の熱心も起こらない」⁽³²⁾という。

表 1：戦前日本における『Love's coming-of age』の出版単行本一覧（年代順）

年	題目	翻訳	出版社	同性愛に関する部分
1915 年	『自由社会の男女関係』	堺利彦	東雲堂書店	未収録
1921 年	『恋愛論』	山川菊栄	大鐙閣	未収録
1925 年	『自由社会の男女関係』	堺利彦	文化学会	未収録
1925 年	『性の栄光』	矢口達	文省社	収録

一方、単行本の『The Intermediate Sex』は山川菊栄によって翻訳され、1914 年 5 月から 7 月にかけて雑誌の『番紅花』に連載されていた。タイトルは「中性論」とされ、1919 年に堺利彦の翻訳とともに『女性中心と同性愛』に収録され出版されたことがわかる。Michiko Suzuki (2015)⁽³³⁾と Sarah Frederick (2017)⁽³⁴⁾の研究によると、吉屋信子をはじめとする女性知識人はカーペンターの古代ギリシアにおける男同士の親密な関係に対する見解を当時の日本における少女同士の愛という文脈に置き換えたとみられる。

4. 2. カーペンターの「同性愛」への過剰な関心

このような近代日本におけるカーペンターの受容に対して、1920 年代の中国の知識人たち、どのようにカーペンターの同性愛研究を理解していたのだろうか。カーペンターの受容の嚆矢となったのは、1918 年の『新青年』に掲載された周作人によるカーペンター『Love's coming-of-Age』の書評であった⁽³⁵⁾。周作人は、カーペンターの本から「両性問題に関して、多くの良い示唆をもらった」と述べ、カーペンターの言う「人間の身体やすべての本能と欲求を承認する」という主張を評価した。周作人によるとカーペンターの性の改革とは、「将来の社会において、新たな理想や生活を成立させ、自由と誠実に基づき、両性の関係を改良させること」だという。

1920 年代に入って、カーペンターの代表作である『Love's Coming-of-Age』と『The Intermediate

Sex』がそれぞれ単行本として中国で出版された。『Love's Coming-of-Age』の最初の中国語版は1920年に後安によって訳され、前の周作人の書評での題の翻訳からとって、「愛的成年」と名付けられた。同書は20年代以降、多くの知識人に読まれて大きな社会反応を引き起こしたとみられる。1920年から1929年にかけてのわずか9年の間に、カーペンターのこの二つの著作は繰り返して雑誌に掲載され、単行本として出版されていた。詳細な出版経緯は、以下の表2と表3にまとめた。

表2：エドワード・カーペンターの著作の雑誌掲載一覧

年代	掲載誌	訳者	タイトル	原作
1920年	『婦女雑誌』（上海）：第6巻第8号，1-14頁	正声	中性論	<i>The Intermediate Sex</i> の第一・二章
1923年	『教育雑誌』（特集：性教育）第8号	沈沢民	同性愛と教育	<i>The Intermediate Sex</i> の第四章「Affection in Education」
1924年	『民国日報 婦女周刊』：第11号から33号にかけて連載	海燕	恋愛論	<i>Love's coming-of-age</i> の全訳（英語から訳出） ⁽³⁶⁾
1926年	『民鐸雑誌』6（5）、7（3）、7（5）	仲雲	恋愛的成熟	<i>Love's coming-of-age</i> の前半（後に単行本として出版された） ⁽³⁷⁾
1929年	『新女性』第四巻の第四号と第五号に連載	秋原	同性恋愛論	<i>The Intermediate Sex</i> の第三章 The Homogenic Attachment の訳文。（英語から訳出したことが推測できる）

表3：エドワード・カーペンターの著作の単行本出版一覧

年代	出版社	訳者	題目	筆者による注釈
1920年	晨報社叢書第二種	後安	愛的成年 ⁽³⁸⁾	堺利彦訳『自由社会の男女関係』（1915年・東雲堂書店）から重訳。
1920年	社会経済叢書	陳望道	女性中心と同性愛 ⁽³⁹⁾	堺利彦・山川菊栄訳の『女性中心と同性愛』から重訳。
1927年	開明書店	樊仲雲	加本特恋愛論	日本語からの重訳であることが明記されていない。前述の通り、初出は1926年に雑誌に掲載された。
1929年	大江書舗	郭昭熙	愛的成年	序文は陳望道によって書かれた。日本語

				から重訳したことは同じく明記されていない。ただし、雑誌での広告は山川菊栄の『恋愛論』の序文とまったく同じである。(1925年、山川菊栄、『恋愛論』・大鑑閣)
--	--	--	--	--

このようなカーペンターの著作の再版と翻訳は何を意味するのだろうか。第一に、前述したように、堺利彦山川菊栄による『Love's Coming-of-Age』はどちらも同性愛を論じる「中性論」という章を省いていたのだが、中国語に訳された際に底本となる日本語版には収録されなかった「中性論」の章があえて補足されているのである。これに関しては工藤貴正(2010)⁽⁴⁰⁾も指摘している。だが、工藤氏の考証はまだ不十分なところがある。「自国の移入に不必要な箇所は省いた」とは述べるものの、近代中国に何が「必要」とされていたのかというそれ自体を論じていなかったのである。第二に、近代日本における『The Intermediate Sex』の受容は、カーペンターの言う「同性愛」を少女同士の愛に置き換えられていたが、中国では、むしろ社会主義思想として注目された。第三に、1920年代の初めごろに、日本語から重訳されることが多かった。1920年後半に入ると、英語から訳されるバージョンも次々と現れてきた。しかし、本の題目及び当時の宣伝から見れば、日本語のバージョンと密接に関わっていることがわかる⁽⁴¹⁾。

さて、なぜ民国期の中国ではカーペンターの「同性愛」論が必要とされたのだろうか。ここでは、1930年に北新書局に出版された『同性愛問題討論集』を中心に、「同性愛」をめぐる男性知識人の論争、すなわちクラフト＝エビングの同性愛論への無関心及びカーペンターの同性愛論への関心について論じる。

5. 医学への無関心か：『同性愛問題討論集』における知識人たちの論争

1929年、雑誌『北新』において、楊憂天は「同性愛の問題」(同性愛的問題)を発表し、「同性愛」が変態性欲の一種であることを主張していた。後に胡秋原は「同性愛の研究」を発表し、「同性愛」が変態性欲ではないと批判し、「同性愛」がプロレタリア運動における同志の愛を意味する新たな意義を提唱する。この二作は『同性愛問題討論集』に収録され、1930年2月に北新書局から出版された。本節では、『同性愛問題討論集』における楊と胡の対立を明らかにし、その対立から「同性愛」に関する知識人たちの認識を検討する。

最初に、二人の対立に関する先行論をまとめておく。この論集を最初に発見し研究したのは Wenqing Kang であった。Kang は同性愛を巡る言説の中でのこの論集の重要性を指摘しながら、楊と胡の双方ともが「ダーウィンの社会進化論」(social Darwinist evolutionary)の理論から影響を受けていることを指摘した。二人の議論の焦点となるのは、同性愛が社会的に肯定・否定的な影響をもたらす可能性に関するものである。次に、陳静梅(2013)も Kang の研究内容を踏襲

しつつ、楊慶堃が「同性愛」を伝染する病としている一方で、胡秋原はカーペンターを援用することによって、読者に同性愛の「健全なるイメージ」を立ち上げたと評価する。

確かに、楊慶堃と胡秋原の対立は、民国期の中国に受容されていたクラフト＝エビングを代表する医学派とカーペンターを代表する社会派の対立といっても過言ではない。しかし逆に、この討論集は中国近代における同性愛の医学への無関心を反映する重要なテキストでもある。さて、以下では、二人がいかにして具体的に「同性愛」を定義し、語るのかを検討していく。

5. 1. 楊慶堃の「同性愛の問題」

最初に著者の楊慶堃に関して簡単に紹介する。楊の執筆活動を考証するに当たっては、例えば、1929年に『北新』に掲載されていた文章「一九二八年の日本文芸界」⁽⁴²⁾において詳しく日本の文芸情報を紹介していることが注目される。また、その本文にも文末に「於東京」と記されており、彼が日本からの影響を、とくに日本の同時代の性科学の影響を受けたことを推測できるだろう。

楊は最初に、自分が性科学の博士、教育の専門家、心理学者や医者ではないことを表明し、それでも知識人として同性愛の研究を提示する必要があると記した。楊は、アルバート・モル(Albert Moll)や、クラフト＝エビング、オットー・ヴァイニンガー(Otto Weininger)などの理論を引用しながら社会問題としての同性愛を提示していく。その中でも、特にクラフト＝エビングからの影響を受けたところが多く見られる。楊によると同性愛という現象とは、次のように説明されている。

同性愛は男女を問わず、その人の身体に、他方の異性的な成分が含まれているか、すなわちどれだけ異性化しているのかを意味する。このような異性的な成分は、他の同性に対し異性的な同性に相当し、恋愛が行われることとなる。従って、同性愛は、男女を問わず、本質的に言えば二種類に分けられる。すなわち、単性的同性愛と複性的同性愛である。(2-3頁)⁽⁴³⁾

このように、男女の差異は生殖器からの区別だけではなく、身体の成分によるものでもあるとされる。さらに、楊は細胞に性的な成分という要素があり、それによって男女が区分され、同性愛・異性愛の行動にも影響を及ぼすということを提示したのである。言い換えれば、男女とも両性具有的な身体の持ち主であり、性的な成分という分量によって異常・正常の境界線を決め付けられるということだ。したがって、同性愛は、結局身体の異常に現れるとされ、女性的男子及び男性的女子の性倒錯に帰結させられたのである。

このような女性的男子とは、男性脱化、もしくは女化ということである。このような男性的な女子とは、女性脱化、もしくは男化ということである(11頁)。

さらに、例えば女性同性愛の場合、「性格及び態度が男性に酷似し、さらに男性の服を愛着して」て、時には「短い髪のをして、化粧もせずに、男性の帽子を冠り、男性の靴を履き、付け髭をする」等と女性らしくない振る舞いすることが、同性愛者であると論じられている。その上、楊は中国の有名な伝説、父に代わり男装し従軍するという花木蘭（ムーラン）もその一例として挙げた。

Kang は、楊の理論には日本の性科学者の澤田順次郎からの影響が窺えると指摘した。確かに、楊氏の「男性脱化」、「女性脱化」、「女化」、「男化」、「半陰陽」等の言葉は、クラフト＝エビングの理論の日本語から借用したと推測できる。そのため、楊は澤田順次郎からの影響というより、むしろ大正時代から流通していた日本の通俗性欲論、すなわちクラフト＝エビングの受容とともに展開していった日本の「同性愛」に関する理論から影響を受けたと言えるだろう。

とはいえ、楊の論説からは同性愛への中国知識人のまなざしが窺える。まず、冒頭の部分で記されているように楊は自分が専門的な学者ではないという立場を表明している。澤田順次郎、羽太鋭治、田中祐吉（香涯）等、日本では「通俗性欲学」を牽引した⁽⁴⁴⁾のは医学者や医学博士であったのとは異なり、中国では楊憂天や胡秋原をはじめとする知識人、社会の改革に関心を持つ知識人であった。彼らの「同性愛」への関心は社会問題としての「同性愛」への関心である。換言すれば、知識人たちは性倒錯の理論などを紹介してはいるものの、彼ら自身は医学に無関心なのである。楊の論では「異常」「変質」「治療」等の用語が見られるが、最終的には「如何に同性愛を防止するのか」という中国の現実に戻る。楊は次のように述べている。

同性愛を防止するという問題を話すのであれば、全世界の偽りの道学の中で苦しんでいる千万の青年の男女に代わって、私は性の秘密を解放することを要求する。この張り子のトラを潰さなかったら、男女が誤った性慾に導きいかれるだろう。（中略）性の秘密を一日に解放されなければ、性教育の話はできない。性教育の話を語ることができなかったら、同性愛は流行していき、蔓延してゆくほかない。（46－47 頁）

引用した通り、同性愛を「防止」するや同性愛を「蔓延」させないといった主張は、同性愛が誰でも起こり得るものだということを含意するだろう。結局、同性愛は先天的病理・変態ではなく、異性愛秩序と対立する悪い「風潮」とされるのである。したがって、同性愛を同性愛者の個人的な問題にするのではなく、教育や社会における性道徳の問題に還元していると言える。このように、医学から誕生した「変態」「倒錯」等の言葉は日本語に由来する可能性が高く、中国語に導入する際には文字上の意味だけにとどまり、構造的な知識体系の受容は空疎であったと見られる。

5. 2. 胡秋原の「同性愛の研究」

次は、楊に対する胡秋原の応答を見てみよう。胡秋原（1910－2004）は民国期に活躍していた文筆家、評論家である。彼は1929年に日本東京早稲田大学に入学し、1931年に帰国した⁽⁴⁵⁾。同書を執筆していた時期は、彼が日本で留学していた頃であることがわかる。

胡は楊の同性愛に関する観点を「一種の異端」「一種の猟奇的な罪惡」と片付けている。彼は楊の文章が社会の一般的な意見であると述べ、自ら先端的な研究を紹介することを宣言した。ここで先端的な理論を紹介するということには意味があっただろう。というのは、当時は革命文学が盛んに議論されていた時期であって、劉劍梅（Liu Jianmei）が指摘した通り、「新」という名の進歩的なイデオロギーに追いかけられた知識人たちは、「より新しい」、より「革新」な認識を追求していた⁽⁴⁶⁾のであった。したがって、胡の話から分かるように、クラフト＝エビングの理論よりも、社会主義理論に位置づけられるカーペンターの同性愛論のほうが「先端」であるとされたのである。

しかしながら、彼は「同性愛」を擁護するというより、むしろ今まで語られてきた変態性欲や同性愛の概念を放棄し、新たなカテゴリーを再構築しようとするのである。さて、胡による「同性愛」とは一体何を意味するのだろうか。

「同性愛」という概念について、胡は「友愛」（Friendship love、原文から引用）、「友誼」、「恋愛」等の言葉を羅列している。これに対し、「異常」な「犯罪的な」同性間の性行為を「同性姦淫」や「同性交」、「男色」、「性的発散」と称している。このように、胡は同性間の変態的性慾と同性の恋愛とに境界線を引こうとしている。胡は、変態的、肉欲的な「同性交」を提唱しないという態度を示し、読者にくれぐれも誤解されないようにと繰り返し主張している。

しかし、ここでは読者に厳粛に声明し、注意して頂きたいところがある。それは先天的な恋愛同性者と、好奇心に基づく肉欲や性に溺れる者たち、もしくは一般的に性的な欲望を満たす機会に欠けている（例えば学校や軍隊において）ことによって、同性間の性行為を行う人たちとは、まったく異なっているということだ。だが、一般的にはこのようなことははっきり区別がつかなくなるのだ。これは同性愛の価値は存在するのかという根本的な問題である！後述するが、ここでは少しだけ触れておく。Urnig 性格あるいは傾向に所属している人たちは同性愛的な傾向が本能的なものであり、先天的なものでもある。心理的にも生理的にもその人の生活にまといついており、根深く強固で不可解である。しかし、後者は、はっきりと犯罪行為であると周知され、これは言うまでもなく病態的、異常的、肉欲的なものである（後略）。（70－71 頁、括弧は原文で、省略は引用者によるものである）

ここでは胡は、心からの友愛、純潔でかつ偉大な同性恋愛を「Urnig-love」と名づけている。

さらに、「同性愛」を「恋愛同性者」に還元しようとし、彼/彼女たちを「Urning」、「中性者」と称する。

楊の分析とは異なり、胡の主張による同性の親密的な関係は芸術的・美学的な精神と文化であり、民国期の中国から遊離しているように見える。さらに、胡は少くない紙幅を割いて、「友愛と文芸」を論じている。胡は「同性愛情」を「ギリシア文化の柱と底流」と看做し、アリストテレスやプラトンをはじめとし、さらにシェイクスピア等の文学家や芸術家を含め、彼らの「友愛」論を引用し、立証している。胡による「同性愛」の意義は、実は性の不在を前景化している。

多くの堂々としている指導者の中性者たちは一決して少数者ではない—肉体的には慎重でかつ正々堂々である。なかにはある種の肉欲を持つ者も居るが、少数の瑕疵によって全てを無視することはできないだろう。(181 頁、省略は引用者によるもの)

同性間の結びつきは、ある程度の肉体的な表現であれば、例えばキスやハグ等、広く行われ合理的なのであるが、しかしその境界線を超えると、放埒な邪道に陥ってしまい、愛の神から遠ざかっていくのだ。(201 頁)

つまり、彼は性的な絆を「瑕疵」と称して、非性的な結びつきを「正々堂々」とであると強調しているのである。教育においても、少年たちの「性的な発散が早すぎると、愛情の価値を低廉させ、衰弱させる」と主張し、真なる愛情と友愛は脱性的な関係であると述べている。胡による同性間の親密的な関係は、非常に広範な「人間愛」であり、女同士によるフェミニズム運動も含め、全ての進歩・解放の意味を含意する同性間の関係性を指すものであるという。マルクス主義者として、胡は「未来の共産主義社会において、人類は広い同志の愛の絆の中、手をつなぎ一緒に労働するに違いない」と予言している。さらに、「将来、性欲と生殖の重要性が徐々に失われていくに違いない。その時には、友情こそ人と人を結びつけるエーテルとなるだろう」という。

楊に対する胡秋原の批判はカーペンターの理論に基づいている一方で、カーペンター論の誤読でもある。カーペンターの性的・非性的な絆を内包する人間愛を、胡はその性的な要素を抹消して「純潔」な連帯を提唱しようとし、20 年代の後半から徐々に勃興していく中国のプロレタリア運動や社会主義運動と結びつけている。さらに、カーペンターが個人のアイデンティティである「同性愛者」とはある種の同性愛を擁護する糸口であるとする一方で、胡の言う「中性者」や「Urning」はあくまでも芸術の才能が優れている人にほかならない。胡によるカーペンターの受容・誤読は、西洋の性科学の欠如によるものであろう。

最後に、二人の「対立」をまとめよう。楊憂天の文章は性科学の観点からいかに同性愛を研

究するののかという問題を論じているように見えるが、彼の結論からは彼自身の医学への無関心が露呈しているのである。したがって、楊と胡の論点は一見異なるものの、実は一致している。両者は「同性愛」を社会・国家・民族という大文字の問題に還元するが、個人の性欲は墮落や変態と片付けるだけで、個人の性を研究することには無関心であった。双方の食い違いは「同性愛」への定義の相違であって、同性間の性行為に対する反対や賛同の態度によるものではない。

これまで見てきたように、1920年代の中国における同性愛に関する知は、日本を経由して導入されてきたものが多くみられる。中でも、クラフト＝エビングとエドワード・カーペンターの同性愛に関する知は知識人の認識を形成する重要な役割を果たしていた。知識人たちは、クラフト＝エビング論の医学的まなざしからの同性愛問題よりも、社会制度の改革としての同性愛問題に関心を持っていた。同性愛者を擁護するカーペンター論はプロレタリア運動や社会主義運動と結び付けられて人間愛として理解されていたと考えられる。

6. 結論

本稿は、近代中国の知識人たちは同性愛に関する西洋の科学をどのように翻訳して、受け止めていたのかを考察するものである。「顛倒色情」や「変態性欲」、「同性恋愛」、「同性愛」等大正期に徐々に定着していった用語や概念は、中国の知識人によってそのまま中国語でも流通するようになった。ところが、これらの概念には日本の文脈が深く沁み込んでいるにもかかわらず、その背後にある医学的な知識は欠如していた。換言すれば、中国語の「同性愛」が語られるときには、「変態」、「顛倒」、「病理」などといった日本から導入された漢語が使用されるものの、それは文字上の意味にとどまるだけで、構造的な知識体系は空疎なのであった。そして、日本語から導入された「同性愛」という言葉の意味するものは、中国の歴史上に既存の「男色」などの同性同士の性行為を指し示すのではなく、むしろ複雑な新たな概念として誕生したと言える。

近代日本では、西洋の性科学が多くの知識人によって咀嚼され、性欲の正常・異常といった医学のイデオロギーが浸透しつつあった。一方、近代中国の歴史においては、魯迅をはじめとする知識人の「棄医従文」（医学を断念し、文学の道を歩む）が象徴的なエピソードであろう。つまり、医学は個々の病を治療するための知であって、中国や中国人といった国家・民族の精神を改革できる知ではないとされたのである。大正期の日本では、通俗性欲学が肥大化していくのに対し、民国期の中国の知識人たちは、近代化教育制度とともに誕生した「同性愛」の社会問題をいかに解決するのかという態度を示していた。とりわけ、カーペンター論の導入により近代中国における「同性愛」のカテゴリーは既存の禁欲主義的な礼教と戦う武器となり、新たな人間関係や連帯感を表す言葉となった。一方でクラフト＝エビングやエリスの性倒錯理論が紹介されるものの、知識人たちの関心の焦点となるのは社会問題としての同性愛であり、個

人の性の問題としての同性愛ではなかった。

現在、ホモセクシュアリティを指し示す中国語は「同性恋」と表記され、この言葉の定着はおおよそ1980年代だとされる。「同性恋」という言葉自体は潘光旦が翻訳したハヴロック・エリスの「性の心理学」に由来する⁽⁴⁷⁾。このように、1940年代に刊行された潘光旦の翻訳をきっかけに、民国期に進歩的な人間愛と見做されていた「同性愛」の概念は、徐々に病理化・変態化・犯罪化することとなり、西洋性科学的な認識枠組みが成立したと言えよう。中国におけるハヴロック・エリスの受容及び「同性恋」の概念の誕生については、今後の課題にしたいと考える。

注

- (1) 新井正人「"Vita sexualis"という言説装置：森鷗外におけるクラフト＝エビング受容」『日本近代文学』87、2012年、33-48頁。
- (2) 近代日本の女性知識人によるハヴロック・エリスやエドワード・カーペンターの受容については、以下の研究を参考にされたい。黒澤亜里子「一九一二年のらいてうと紅吉ー「女性解放」とレズビアニズムをめぐって」、西田勝退任退職記念文集編集委員会『文学・社会へ・地球へ』、三一書房、1996年、309-327頁。赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』、角川学芸出版、2011年。
- (3) 近代日本における男性同性愛者の主体表現について、以下の研究を参考にされたい。竹内瑞穂「近代社会の＜逸脱者＞たち—大正期日本の雑誌投稿からみる男性同性愛者の主体化」、『ジェンダー&セクシュアリティ』(3)、2008年、77-94頁。前川直哉「明治期における学生男色イメージの変容」『教育社会学研究』(80号)、2007年、5-23頁。前川直哉、『＜男性同性愛者＞の社会史:アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』、作品社。
- (4) ミシェル・フーコー『性の歴史I 知への意志』(渡辺守章訳)、新潮社、196年、55-56頁。
- (5) 清末の中国では、男性同士の性行為は法律で取り締まられたが、しかし問題化されたのは成人男子による少年への強姦と性暴力であったと見られる。詳しくは以下の研究を参考にされたい。陳寒非『清代的男風、性与司法』上海三聯書店、2016年。スーザン・マン『性からよむ中国史—男女隔離・纏足・同性愛』、平凡社、2015年。
- (6) 清地ゆき子「「同性愛」と“同性恋”の成立と定着：近代の日中語彙交流を視点に」『筑波大学地域研究』(34)、2013年、225-246頁。
- (7) 白水紀子「セクシュアリティのディスコース：同性愛をめぐる言説を中心に（ジェンダーの中国史）」、『アジア遊学』(191)、2015年、211-223頁。
- (8) 桑梓蘭『浮現中的女同性恋—現代中国的女同性愛欲』、台大出版中心、2014年。
- (9) Wenqing kang *Obsession—Male Same-Sex Relations in China, 1900-1950*, Hong Kong University Press, 2009.

- (10) 陳静梅『現代中国：同性恋愛話語訳介及小説文本解説』、西南交通大学出版社、2013 年。
- (11) 韓珊は 20 年代の言説に関して、「混乱する同性愛への賛美と男女共学」(Glorification of Homogenic Love and Coeducation in an Uproar) と称する。(韓珊 *Translating “Homosexuality” into Modern China: Reconceptualization of the Republican Discourse of “Tongxing ai”—“Same-Sex Love” from the Perspective of Translingual Rewriting, 1911-1949*)、修士論文、北京外国語大学、2014 年)。
- (12) 桑梓蘭、前掲、116 頁
- (13) 前掲 (注 5)、スーザン・マン、2015 年、199 頁。
- (14) 斎藤光「Psychopathia Sexualis の初邦訳について 邦訳の原典は原著第何版か? An Original Text of Shikijokyohen(色情狂篇) (1894)」、『京都精華大学紀要』第 17 号、1999 年、72-91 頁。
- (15) 斎藤光「クラフト＝エビングの『性的精神病質』とその内容の移入初期史」『京都精華大学紀要』第 10 号、1992 年、154-177 頁。
- (16) 前掲、斎藤光 (1992)、156 頁。
- (17) これまでの先行研究では指摘されなかったが、筆者の調査によると、1922 年に刊行されたことがあった。日外アソシエーツ編、『翻訳 図書目録 明治・大正・昭和前期Ⅱ』、日外アソシエーツ、2006 年、64 頁。
- (18) リヒャルト・フォン・クラフト＝エビング『変態性欲心理』、大日本文明協会、1913 年。
- (19) 詳しくは、唐権 (2016) を参考にされたい。唐権「從「造化機論」到「培種之道」：通俗性科学在清末中国社会的伝播」、『近代中国婦女史研究』第 27 期、2016 年、1-94 頁。
- (20) 楊力「清末中国の性科学書—『男女交合新論』とその受容」、中国女性史研究会『中国女性史研究』25 号、2017 年、64-76 頁。
- (21) 楊力「清末期の中国における性科学とジェンダー—Creative and Sexual Science とその翻訳をめぐる—」、中国女性史研究会『中国女性史研究』27 号、2018 年、63-85 頁。
- (22) 1895 年 (明治 28 年) に刊行された性科学である。この本の位置づけは「一夫一婦と夫婦和合イデオロギーに、生物学的基礎を与えた」と先行研究の上野千鶴子が指摘した。上野千鶴子「解説」、小木新造・上野千鶴子・熊倉功夫編『風俗 性』(日本近代思想大系)、岩波書店、1990 年、518 頁。
- (23) 唐権「『吾妻鏡』の謎：清朝へ渡った明治の性科学」、『日文研フォーラム』第 275 回、2014 年、1-71 頁。
- (24) 『雁来紅叢報』は、黄摩西によって 1906 年の 4 月に発刊され、同年 8 月に廃刊した週刊誌である。わずか四か月の寿命であるものの、同誌は中国文学史における有名な沈復の『浮生六記』の新たなバージョンを掲載したことでその名声が広く知られていた。
- (25) 筆者が「全国報刊索引」のデータベースから調査したものである。だが、『雁来紅叢報』

に掲載された部分は落丁があり、目次と第一章の総論だけが確認できる。紙幅から見れば、総論だけが掲載された可能性が高いと考えられる。

- (26) 「[批評] 日本法医学会発行 色情狂編」『国民之友』（東京：民友社）、1894 年 6 月。
- (27) 原文：「原人番俗固無足怪而四千年文明國中有使男女裸逐人獸雜交大廷縱觀以為樂者至於交易投贈之風則豪家恆舉愛妾易馬且播諸詩歌為佳話矣甚而殺妓侑殤蒸婢佐饌恐食人之蠻民尚無此不情之舉也。」
- (28) 原文の「袒裼」という言葉は、恐らく「袒裼」の誤字ではないかと思われる。つまり日本語の「袒裼」（たんせき）と同じ意味で、「上の衣服を脱いで肌を出すこと」という意味である。
- (29) 原文：「此說甚踴近日東方婦女之才固出西人之下而其私德則有紺臚金髮之姝所萬不能逮者德之哲學士徐不華所著婦人論會暢言之。」
- (30) Jeffrey Weeks *Sex, Politics and Society. The Regulation of Sexuality since 1800*, Longman, 1989.
- (31) 都築忠七『エドワード・カーペンター伝 人類連帯の予言者』、晶文社、1985 年、16 頁。
- (32) 久津見蔵村「カアペンターの中性観点」、『新社会』（売文社）2（5）、1916 年、22-23 頁。
- (33) Michiko Suzuki *The Translation of Edward Carpenter's The Intermediate Sex in Early Twentieth-Century Japan, Sexology and Translation: Cultural and Scientific Encounters Across the Modern World*. Ed. Heike Bauer, 197-215. Philadelphia: Temple University Press, 2015.
- (34) Sarah Frederick Yamakawa *Kikue and Edward Carpenter Translation, Affiliation, and Queer Internationalism, Rethinking Japanese Feminisms*. Julia C. Bullock, Ayako Kano, and James Welker, University of Hawaii Press, 2017:187-204
- (35) 初出：1918 年 10 月 15 日『新青年』第 5 卷第 4 号，作人『愛的成年』。引用：周作人「愛的成年」、鐘叔河編『上下身 性学、児童、婦女』湖南文芸出版社、1998 年、6-9 頁。
- (36) 海燕訳、「恋愛論」、『民国日報 婦女周刊』・第 11 号。文末では、英語から訳出されたことが明示されている。
- (37) 雑誌に掲載された際に、訳者である仲雲によると、1920 年に晨报副刊によって出版されたバージョンは日本語から重訳したものであるため、誤訳や不十分なところが多いため、改めて翻訳する必要があると記される。しかし、彼自身は、雑誌に掲載された「恋愛論」、さらに後の 1927 年婦女問題研究会叢書によって出版された『加本特恋愛論』に関して、英語から訳したものとは明示しておらず、山川菊栄訳の「恋愛論」のタイトルを採ったことが確認できる。
- (38) 同書の付録では、『新青年』に掲載された周作人の書評を収録し、他にイギリスの Lily Gair Wilkinson の「Women' Freedom」と堺利彦の「男女関係の進化」（レスター・ウオード著『女性中心説』、牧民社、付録 2-12 頁）の翻訳も収録した。さらに、興味深いのは訳者の後安は日本語版が英語版の「The Intermediate Sex」の一章を収録しなかったことを述

べ、友人の兼生に頼んで、英語から訳してもらうことにしたことである。

- (39) この資料は、清地ゆき子（2005）からヒントいただいた（清地ゆき子「日中語彙交流における近代訳語の変容：民国期の恋愛用語を中心に」、筑波大学博士論文、2005）。前述した山川菊栄と堺利彦共訳と同じ題名であるため、おそらく日本語の『女性中心と同性愛』から重訳した可能性が高いと考えられる。この史料は1920年6月7日の『申報』に「社会経済叢書第一期出版予告」として掲載されたことが確認できるが、筆者の調査ではその原稿は見つからなかった。
- (40) 工藤貴正『中国語圏における厨川白村現象—隆盛・衰退・回帰と継続—』思文閣出版、2010年。
- (41) 1930年『文芸研究』に掲載された広告によると、「這是卡氏 Love's Coming of Age 的全譯。與倍倍爾底婦女與社會主義，並為世界婦女論底雙壁。而較之倍氏底現實的科學的，則為理想的而有詩意的。全書分八章：性的慾望，未成熟的男子，奴隸的女子，自由的女子，過去的結婚，將來的結婚，中性，自由的社會。」日本語の序文は以下のようだ。『『婦人と社会主義』と相並んで、社会主義婦人論の双壁である』（1頁）」（1925年、山川菊栄訳、カーペンター著『恋愛論』・大鐙閣）。
- (42) 楊憂天、「一九二八年的日本文芸界」、1929年第三卷第5期、『北新』。
- (43) 楊憂天、胡秋原著『同性愛問題討論集』、北新書局、1930年。以下同様。
- (44) 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房、1999年、164頁。
- (45) 代表作は『帝国主義と中国革命』、『唯物史観芸術論』など。参考：『中国人名事典』、1993年、紀伊国屋書店。『中国人名大詞典・当代人物卷』、1992年、上海辞書出版社。
- (46) 劉劍梅『革命与情愛：二十世紀中国小説史中的女性身体与主題重述』、上海三聯書店、2009年、11頁。（Liu Jianmei *Revolution Plus Love: Literary History, Women's Bodies, and Thematic Repetition in Twentieth-Century Chinese Fiction*, University of Hawaii Press, 2003.）
- (47) 潘光旦「性心理学」、『潘光旦文集 第十二卷』、北京大学出版社、2000年。（初出は1944年であった）